

ユスティノス——哲学者にして殉教者（証人）——たち

「教父」について　ギリシア教父とラテン教父

2世紀の護教家 Apologists；

ギリシア哲学の素養を持つ人の改宗；

そもそも当時の哲学は、ストア派にせよ、エピクロス派にせよ、ヘレニズム世界の中のコスモポリテースとして、魂の平静を生活理想として掲げていた。

真理・幸福を求める *philosophia* が理論化・ロゴス化されたイエス信仰とであらう。

または、イエス信仰と出会うことによって、これをロゴス化・理論化する。

ここでも、先に述べた、信を言い表す際の用語・既成の思想という状況あり。

……『キリスト教のギリシア化』？

初期の教父の代表として、ここではユスティノスを取り上げる。

S. Justinus Philosophus et Martyr (-c.165)　　（ラテン語表記による）

a. 自伝的言及　*Dialogus cum Tryphone Judaeo*¹

150/155

エフェソスあたりで、ストア・アリストテレス・ピュタゴラス各派の門をたたくが満足できず、最後にプラトン派に会って満足する。

非物的なものの知覚によって圧倒された。イデアの観想によって私の思考は翼を

与えられた。私は知者 (*sophos*) になったと想像した。私は愚かにもただちに神を見る

ことを期待した——それがプラトン哲学の目標だったから (PLG 6,477)。

やがて老人に出会う。老人はJが哲学に幸福を求めていること——哲学は幸福をもたらす、

哲学は存在者の知識（エピステーメー）、心理の認識（エピグノーシス）であり、幸福はかかるエピステーメーやソフィアに伴う特権・報酬である——を確かめ、対話が始まる。

老人はプラトンの魂に関する説の矛盾を指摘する：魂の眼であるヌースが神と類縁

的 *syngeneia* ならば、魂は本性的に神的・不死であることになる。しかし魂はそれ自体

として不死でない生命であるのではなく、神から生命を受ける限り生命を持つ。魂は

それ自体として神を見ることはできない。神認識の道は聖霊による預言者たちに求めるべきである。老人はこのことを聖書によって知ったと言う。

そこでJは聖書を読む。すると、

炎が私の心に燃え立った。預言者たちとキリストの友である人たちに

対する愛が私を強くとらえた。……この哲学のみが确实で有益であること

を悟った。かくして私は哲学者なのである（となったのである）。(PG 6,491)

キリスト教こそ人に真理と救いを与えるものとして真の哲学だという考えあり。

ギリシア哲学諸派に対し、相当否定的？　プラトン哲学にはそれほど否定的でもない？

b. ユスティノスの思想

『第二弁証論』 *Apologia Secunda pro*

Christianis ad Senatam Romanum 第10章より²

¹邦訳あり。

²一部は既に引用。邦訳あり。

* ロゴス・キリスト

* キリスト以前の哲学者（ギリシア）・立法者（ヘブライ・ユダヤ）の評価

* ソクラテス像：

ソクラテスにおいては、教説が生き方と結び付いていた。教説に殉じた。

ロゴスはソクラテスの主体的生を通じて現われた。キリスト以前のキリスト者

この点で、プラトン以下と区別して評価する。ただし、ソ．に殉じた人はいない

………と、キリストと区別

迷いの悪霊対真理なるキリストという対立図式の中で、ソ．は後者に部分的に与かる

ロゴスによって（ヒュポ・ログウ）前者の働きを論難し、神探求を勧めた人として

描かれる。

アテネのパウロとユスティノスのソクラテス像

[ユスティノスより]

中でもソクラテスはこのことを誰よりも精力的に試みたので、我々キリスト者と同じ罪で訴えられた。すなわち彼は新しい神（カイナ・ダイモニア）を導入し、国家の認める神々を信じない、と言われたのであった。ソクラテスは、ホメロスもその他の詩人達も国家から追い出しつつ、詩人達が語っているような振る舞いをする、卑小なダイモン達を退けるように人々に教えると共に、未だ人々の知らない神（テオス・アグノーストス）をロゴスの探求により知るよう勧め、次のように言った。『一切のものの父にして、また創造者であるものを見出すことは容易でなく、見出したとしても、それを人々に語ることも安全ではない。』（II Apol. 10）

ギリシア的の神々の否定と「知られざる神＝テオス・アグノーストス」の探求の勧め、という骨子において、パウロのアテネ演説と一致。

ただし、パウロにおいては、人々の宗教的態度ないし神観に

焦点が合わせられていたのに対し、ユスティノスにおいては、卑小な神々対唯一の神という対比の面が強い。

また、ユスティノス描くところのソクラテスは「神を見出すことは難しい」というが、パウロは「見出すこともある」と言う。

さらに、ユスティノスのこの文脈での関心は、「ロゴス」にあったわけだが、それはパウロのアテネ演説にはもちろん登場しない。

こういったずれはあるにしても、我々はユスティノスのソクラテス観が何らか、ルカのパウロ観と関係していることは認めて良いであろう。

ユスティノスによると、ソクラテスはいわばキリスト以前のキリスト者。

その他の Greek Apologists

Tatianus シリア生まれ。ユスティノスの弟子。

Athenagoras タティアノスと同時代。『アテネのキリスト教哲学者』と称す。

Legatio pro Christianis (c.177)

Theophilus (アンテオケの) コウフラテス近くの生れ。

Ad Autolyicum (180 よりちょっと後) 3 巻のみ残存。

エイレナイオス 140-202 ころ 対グノーシス派護教 小アジア・スミルナの人、
ガリア(仏リヨン)で司教。